

三河アララギ

平成二十七年

八月号

第六十二卷 第八号



ニューヨーク日記(106) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Frieze Art Fair New York

Blue Shoe Diaries



フリーズアートフェア最終日にちょっと覗いてきたよ。ランダルズアイランドでやっているからかマンハッタンで行うアートショーほど混んでなくて快適にアート鑑賞できた。モダンでなんじゃこりゃってものも多くってそれもそれで面白い。私にも出来るなんて思ってみたり。ワイン片手にウロウロ。

Artsy Sunday! Some really fun stuff at the Frieze today. And to get into the mood, a nice cold glass of rose 🍷 The show was on Randall's Island. Not as crowded as shows in Manhattan. So it was a nice stroll observing modern art. Sometimes thinking, "hey, I can do that too", which I think it's part of the fun. The difference sometimes is... someone did.

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

沙羅なれば夕べには落つるを知り乍ら折りとりて帰るその一花を

P 1 8 2

つくばひの水に沈みて黄の色のうるみて見ゆる梅の実ひとつ

P 1 8 5

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

血ぶくれの蚊が飛びゆきぬわが足の痒き感じは五分程ののち

蹠より痛みはじまり下半身にひろごりのぼるわが後遺症

娘の見合ひ済みたる部屋にいつまでもメロンの匂ひ漂ひてゐる

歌集 「草々」

今泉 米子

あらくさの繁りの中にぬきいでてほのほの雨のるり柳の花

ブエノスアイレスに新しき暮らし始むるに七月の冬日短きをいふ

降る梅雨にたわみ乱るるエリカの木春の休みに子の植ゑゆきし

稲村の神の山より海とほく夕べは伊勢の志摩の山見ゆ

奉行の家の作法崩さざりし祖母おおははのはるかになりぬ白さるすべりの花

洋傘といふをたづさへお籠にて嫁ぎ来ましきわが祖母は

アルゼンチンの米のうまきを言ひ来ればほのぼのとしてしばらく居りぬ

梱包を剥ぎし板にて机作り個展の凶案を描きいそしむか

松の間に除幕了へたる碑こしほを寿ぎて菘の上に豊御酒を受く

柘榴割れくれなるの粒のつぎづぎに落ちちりばふをたのしみとして

影法師

蒲郡 岡本八千代

半夏^げ近き午後の日ざしが照らしくる今ありて動くわが影法師

入院を免れてけふここにゐる己れの動く影法師かな

待ち待ちし注文の本三冊が今こそ届く夕暮の中

すぐさまに立ち読みしつつ歩きつつ先づは文庫本「銀の匙」より

梅雨寒に白湯を沸かして呑まむとすほのぼの白き湯気みつめつつ

紫陽花の花二種類ともしろじろと今日降る梅雨に雫してをり

「見るものはけふもまた雨」の先生の色紙の中の藍の雨だれ

紫陽花の花に雫するこの季よ先生奥^とさま友在すは天空

雨ふくむけふの風にもわが部屋の風のみちに鳴る君の竹管が

見上げたる淡き茜の夕空にトビ五つ六つしづかに舞ひをり

ハツブル定数

東京 今泉 由利

黒染の衣を纏ふ心地してTシャツジーンズ黒くなりをり

樟くすのきに四手注連縄の結ばれて天祖神社におとなしくゐる

沢山のさびしさだけが残りゆく日々変貌へんぼうを遂げゆくなかに

巻葉あり直ぐ立つ薔浮き葉する不忍池を巡りて今日は

やすやすとエレベーターにて地下深く地下走りゆく地下鉄に乗る

地上には花咲きをらむ風吹かむかれこれ五十分を地下鉄のなか

茅萱ちがやの香ふつと香れり茅輪ちのわしんじ神事素盞鳴尊すさのおのみことの教へにひたる

枯れ茅萱香りの中に分け入りぬ父と母とを伴ふ心

はらはらと淡き紫散り敷けり檣おうちの花の花の絨毯

今も今も膨張続くと大宇宙疲れ果てをりハツブル定数

輪読会

豊川 弓谷 久子

スエ先生の今日は立ち日ぞ七回忌かと思ひつつ一人手を合はせたり
週一度先生かこみし輪読会今ははるかな憶ひ出となる

先生の手作りプリントにたどたと萬葉等学びし日々よ

知らぬ間に花季過ぎをりくちなしに残る小花の二つ三つ

姉の羽織が子のワンピースに変身す作る楽しみに浸りてをりぬ

明日はみさとにシヨートパンツを縫ひやらむみさと好みの古典柄にて

人馴れてパンに寄り来る子雀をうちの子等と我は呼びををり

戴きし梅にて作らむ梅ジュース一粒づつをきれいに拭ふ

今頃は平泉ならむ旧暦五月又読みかへしをり衣川のいくさ

はやばやとなせし衣更え悔いてをり重ね着をする今日の梅雨冷え

タンポポ

新城 青木 玉枝

吹きわたる風にも春の訪れをわが背に受けて朝空の碧^{あお}

今朝は又土手にみつけたタンポポの黄の一色に心和^{なご}みて

軒の巢もつばめの帰る日を待ちてわれも眺めて共に待つ日々

山里の空気のうちまさ日々うけてされど恋しや都会のリズム

雪椿紅梅白梅桃の花間もなくサクラ日本のサクラ

窓を明け庭に真白き雪を見る弥生も間もなく終ると言ふに

土手の上真白く何処まで続くやら杉林までの真白き道が

編み物にぬり絵ちぎれ絵楽しみて習字のひと日はまたまた嬉し

この歳になりて習字の時間とは筆とる手許ふるえふるえて

人生とはわたしにとってなんだろう毎夜にめざめて反省の日び

沙羅

豊川 内藤 志げ

地に一花枝に二花真白なる沙羅の初花朝の窓より

低き空の黄昏どきに鷺一羽羽根をたゆませ東に向う

鉢の下平たく大きな穴の中鼠色なす蜥蜴か金蛇か^{へび}

藍と緑とに本宮の山清々し薄き白雲中腹に浮く

黄昏に明るき空を背景に本宮山は黒く際立つ

花を終え枝整えし沙羅の葉をさらさらの風ガラスの窓に

筍と竹となりゆくほつれ枝東の藪は数多つくつく

ビニールとサンサンネットを鳥除けわれのみ知るは西瓜の有処

暑き日に家族揃うはたまたまに西瓜切るよとわれの呼びかけ

手術後三日目にして立てたよと媪はわれに電話をくれる^{あと}

山の散策

岡崎 林伊佐子

新鮮な朝の空気を吸いながらひとり楽しむ山の散策

しづやかに梢をわたる山の風ゆるる梢と揺らざる梢

山はいま若葉あかるく吹く風の鳴りゆく中に深呼吸する

蒲公英の丸き穂絮の先ざきに朝露ひかるふる里の野路

流るる汗ながるるままに茄子畑にひと鍬ひと鍬うねに土盛る

目にしみる汗ふきながら西瓜畑に受粉しながら日付をしるす

汗みづく服を着替えて夕餉する老いし二人の楽しき団欒

障害という身おもわず生きて行く音なきこの世にいつしか馴染む

聴覚を失せたる吾に添ひましし夫も寂しきひと世と思う

ひとつ蝶ひとつのままに青天をめざして高く舞ひ立ちて行く

飛行雲

豊川 安藤 和代

田蛙の澄みて聞こゆる夜の部屋にはねたる夫の布団かけやる

この朝に朝顔の芽のひよんと出て幼の様な夫の喜び

病みてより心やさしくなりし夫合せて私もやさしくなれり

折あらば夫と旅行がしてみたし見上げる空は飛行雲浮く

亡き嫁の植えたる花がこの年も清しく咲けど花の名知らず

用水の流れは深く夏の音田の面じわじわ水増してゆく

菊苗に混じり育ちし十薬を同じ命と抜くをためらう

孫達のカラオケの曲になじめずに夫は十八番「北国の春」

夫の歌夢の様なり喜びの涙なみだで拍手を送る

カンナ咲き悲しみ苦しみ思い出す今年のカンナは喜びの色

根曲り竹の子

東京 足立 晴代

青梅を採り去りし庭は何となく白き紫陽花侘びしく咲をり

夏衣纏まといて暑さ忘るゝも涼しき風の流れ来るのを

突風の窓つき破る凄まじさ無事なる命幸にして

天と地の怒るが如き様々の異変さまざまおこりて恐ろしき日々

他人事ひとと思えぬ日々続くなり天災地変無きことを祈りて

深山路に入りて掘りたる根曲りの竹の子熊も好物なりとや

根曲りの竹の子一包はるばると送りし人の心嬉しく

熊の道掘りし根曲り竹の子の薄うすき緑の衣まといて

送られし竹の子食し山の味和らかくして齒はごたえありき

朝夕の送迎バスにゆられつゝシャツキリ体操通う日々なり

語源

沼津 鈴木孝雄

沖合の水面黒く盛り上がり鰯の群に海鷗飛び込む

テイカカズラ桜の古木にしがみつき梢から垂れて白い花咲かす

香勝寺紫と白のキキョウ花観音様に守られ咲けり

極楽寺境内を埋める七色のアジサイ迫りて天に至らん

明日は雨今日しかないと意を決し白ネギの苗深溝に移植す

デイルの種芽吹いた時は頼りなくすすく伸びて爽やかに香る

デイルの葉にアゲハチョウの幼虫が虫の世界もグローバル化

三尺に伸びたデイルの先端に黄色く広がる畑の花火

薄緑アブラムシを手で殺す指がすすべ語源納得

色付いたトマトが鳥に突かれて不便を承知で防鳥ネット

故郷の

春日井 清澤 範子

受賞したる歌幾度も読みかへす夫も娘も喜びくるる

鳥の声聞きて目覚める今朝は雨床の中にて静かに聞きぬ

公園の梅の木しっかりと実をつけぬ公園の中は緑の滴くしずく

遠出は出来ぬ夫も吾も楽しみは旅番組の映像を観る

故郷ふるさとの安曇野穂高は爛漫らんまんに八重の桜と桃の咲く頃

常づねとなりたる神社の参拝に遥かに飛行機通り行く音

堤防に添ひて散策杖つきて小鳥の声に癒されながら

吾が庭に雨は静かに降り始む椿の新芽に露は光りぬ

新聞の台所情報参考に献立作るも楽しみのうち

娘と吾と鉢に植ゑたるベコニアは赤き花びら逞しく咲く

ひがみ心

大阪 伊藤 忠 男

病院も流れ作業か検査室次から次と患者送らる

朝霧に霞む森から鳥の声あれはツグミかキジにヒヨドリ

久ぶり挨拶そこそこその場では懐かし話題ことかかぬなり

何もかも昔に戻りはな咲かすなれど帰らぬあの歳のころ

雨上がり紫ピンク白に赤色とりどりにアジサイは咲く

何にでも始まりあれば終わりありだとして終わりが始まりもある

余命とて今やたかだか十余年何を残して何諦める

終活は整理整理に明け暮れる先ずは心の整理からなり

命などどうでも良いと言いながら長く効くザブリ聞けばまた買う

侘びさびの出合い求めて堺街利休宗久今紹鷗に

江戸城

東京 森岡陽子

剪定を終へた古木の枝先の青梅揺れて小鈴の音す

あき屋敷誰に見せるか額紫陽花うつ蒼とした庭すみに咲き

優駿の血統繋ぐ繋ぎ行く舞台はダービー三歳馬駆ける

夏の夜の光優しくもれきたる枝葉の先にまんまるの月

雨の中旧宮家跡の美術館並ぶマスクは喜び蒼々

梔子の花が迎へる庭園は小雨の中に優しく香り

梅雨の間を江戸城ぐるりウォーキング積まれた石垣四種の型と

本丸も大奥中奥中雀門松の廊下も歴史のままに

両陛下揃って御手植え果樹畑梨桃林檎日本の原種

声掛けにすつと集まる亀亀亀甲羅顔つき違い其其

梔子

東京 富岡和子

年ごとに真夏日早くなるらしき梔子くちなしかおる日陰に休む

梅雨ちかし若きママ達笑いの輪小さき公園薫風のもと

皇居へと真つ直ぐに通ず駅舎には異国の人らカメラしきりと

陽当りに移せし苗は自生種ひとりばええび色や赤や鶏頭の花

庭に咲くアカバンサスとハマオモト礼拝の朝講壇かぎ彩る

降り止まぬ小径におちた青き柿萼を布団に小坊主みたい

梅雨はれ間花魁草わいらんそうのたおやかさ風雨に委ね満開の夕

影ながら満月さやか夜半まで室燈なしに風も満喫

読書会いつの間にやらおしゃべりに過ぎし日おかしを書物みたいに

知らぬうち寝入る刻ときあり昼下がりがりむかし変らぬ祖母の思い出

水無月

名古屋 近藤 映子

つゆ入りてどんより曇り雨も降る検診日に傘の離せず

咳止まりやくぐつすり寝たり水無月の八日過ぎて

吸入器通院時にも持ち歩きそれでも咳は続きたり

ようように咳のおさまりゆつくりと寝むれるこち良さ

同級生四月生れは早や八十路とわれはまだまだ三ヶ月後なり

つゆ入りて曇り日なれども雨などは降る様子なしこれでいいのか

わが筋無力症はこたえたり手足の痛みは休むこと無し

痛み止めロキシニンテープは有り難しかぶれずしのぐこの一時よ

孫の顔見る事嬉し娘と共に杖を付きく新幹線に乗る

孫の成長目覚ましく早くも第一反抗期のきざし一歳半

前畑に

新城 半田 うめ子

里芋を少し作りて前畑に何時ほらむかと楽しみ見て居り

行きくれて千種の森にて一夜過ぎ義母と二人思ひ出すなり

時々飲みてゐるなり胃散なるやさしき孫より貰ひし薬

大根の切りぼしを時々にて貰ひ食みをり楽しかりしよ

東の杉林の木は切りはらひてからすの住み場無くなりたりき

浜松の温泉へとの時々にて孫の親切楽しみて居り

簡素

蒲郡 杉浦恵美子

夏至近き逢妻川の川面には夕陽朱鷺色映して居たり

夏至の白は刺繍と読書の繰り返し居間のカウチがわたしの宇宙

これ以上簡素な暮しもあるまいぞ日がな一日刺繍と読書と

夏至の日は夫としみじみ語り合ふならはしありき夫在りし頃

それが今独りになりて持て余す何しろ長い日照時間

迷ひつつ漸く知立に辿り着く屋上駐車に向ふは入り日

我が夫の本籍なりし碧南を夫亡き後の友と訪ねる

だがしかし小さな哀しみ積み重ねやがて凡ては朧とならん

間違はるほどにそんなに似てるのか母晩年の歳に近付く

亡き後の四半世紀茫々世間には母とわたしは大差ないのか

初物

豊川 平松 裕子

久々の月の明りが我が門かどのゆるき石段清さやかに照らす

幾年も上りて下る我が門の右の階段慣れることなし

厨辺に大きスイカを割りてをり分かち届ける背戸の人なし

初物は分かち食み来し背戸の媪おばあ今なきことがただただ虚し

いづくにも君が姿は消え失せて空あき家やとなりし家のみ残れり

悲しさとも寂しさとも言い難きたただ虚し居ぬことの虚し

裏の垣さつばくの雑木低く刈り込みて西日明るき梅雨の晴れ間の

予報通り午後は明るき陽の射しぬ媪の庭に小鳥囀る

風強くなり来し夜半に背戸の家の勝手口のドアの強く閉まれり

幾十年通ひし背戸の家の門再び踏み入ることはあるまじ

半夏生

豊川 山口千恵子

やはらかき巻葉出で初むモンステラ乾ける鉢にコップの水を

はや今年も花咲く季となりにけりふくらみきたるフウランの蕾

細々と出てゐる蕾二本あり明日あたり咲くフウランの花

燈明をあげに来たれるわが村の神社に繁る樹々幾百年

ぼろぼろと小粒の白きものの散る赤実とならむ南天の花

庭隅のひと処に繁る半夏生白々目立つ夕暮の中に

葉陰にて太くなりたる胡瓜一本初成りなりと言ひつつ食みたり

忽ちに田の植ゑられて西川に小苗はそよぐ小さく揺れつつ

今年よりわが田を人に貸したりき少し淋しき思ひのしつつ

わが田にも苗植ゑられて風にそよぐ今年よりわれはかかはりのなし

梅雨入りの雨

豊川 夏目勝弘

イラクサのまたカヤ等に狭くなりしホームに降りるはわれ一人なり

梅雨空を映す水面に我が目には見えぬ雨の波紋ひろがる

投げし石に広がる波紋も降る雨に広がる波紋も同じ円なり

夕暮の雨に庭石目立ちきぬ網戸を通る風を楽しむ

バラの香の煙りは網戸を透りゆき見えざる雨に消えてゆくなり

街中のケヤキ並木はムクドリの対策なりと剪定さなか

予報より二時間早く雨となる早目に帰らむ地下街に下りる

アジサイの紫にゆかずアゲハ蝶は淡き紅のネムの花へと

夕風に大きくゆるるネムの花止りかねるアゲハの蝶は

香を炷き夕日に浮きたつネムの花を楽しむ時間の今はあるなり

夏至

横浜 阿部 淑子

足上げの平衡感覚乏しきによっしやと気張り毎夜の練習

始めようと湧き立つ思いあるうちは時を逃がさず進み行きたし

散歩道垣よりのぞく柘榴花幼き頃の庭ぞなつかし

オペラ跳ね明るい夜道を歩きつつ今日は夏至ね友と語りぬ

オオゴマ（大故麻斑）ダラの平和の蝶をとばしつつ恒久平和を祈る沖繩

笹百合

豊川 白井 信昭

鶯の声ばかりして山のなか崩れし土砂を直してゐたる

一本の日陰に育ちし山椒の葉あわれ虫に食われてしまえり

恋いて来しさがらの森に咲き残る笹百合のいよよ減りたる今年

蔓先を見守りて来し一週間生け垣越して八メートル余り

俊成の里短歌大会 第三〇回(平成二十七年)

【藤原俊成卿和歌】

みよしのの花のさかりをけふみればこしのしらねに春かぜぞふく

(長秋詠藻)

吹く風の心とちらす花ならばこずゑにのこす春もあれかし

(長秋詠藻)

やまざくらさくより空にあくがる人の心やみねのしら雲

(長秋詠藻)

【選者賞】

蒲郡 鈴木美耶子

健診の結果は今日届きたりなぜか通知票開く心地す

【入選】

蒲郡 石田文子

嫁ぐ日の間近となりし孫娘段差の道に吾の手をひく

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

びかぴかの鱗の光る鯉のほり作手の村にも青空の中
自転車に我を追ひ越す女の子初夏の風に髪なびかせて

岩瀬 信子

五月晴れ看病介護の話きく身近かとなりし言葉の重さ

侘しさにテレビつけしがすぐ消しぬ画面の笑ひもなぜか空しく

石田 文子

白猫の尾のよな白茅ちがやの穂の揺れて吾は草原にゐるごとくして

深緑に映えてふはふはの穂のゆるる草原に立つわが夢心地

森 厚子

わが庭に甘き香の漂へりこの夜の木の間に鶴ぬえひそみゐるか

曾孫よりの祝の色紙に涙する卒寿のははの思ひはいかがか

山崎 俊子

捕虫網かざして太郎は畑の中蛙の餌に虫を捕るのか

早苗田の畦に揺れをり姫紫苑梅雨の晴れ間のそよ風の中

三田美奈子

店先の鉢植ゑトマトの熟れ熟れり今年の母の日これを贈らむ

夫とわれドナーカードを持ちしこと知らずに過ごせりこの二十年を

水野 絹子

それぞれの道を生きたる君とわれそれも理想かとけふは思ひつつ

瓜蠅が見つけしカボチャの苗一本われ知らぬ間にネットになりをり

牧原 規恵

いつからか想ひ出ばかりを言ふ母に頷きつつも雨だれ見てをり

庭隅にひそと育ちし春蘭は今年も淡く花開きをり

稲吉 友江

連休に息子二人がそろひ来てかつてのやうにわが家にゐるゐる

健診の結果は今日届きたりなぜか通知票を開く心地す

鈴木美耶子

空木咲く背戸のアプローチ歩みゆけば初夏の風類にかそけし

わが畑にできたる緑の莢エンドウ夫と幼がもち帰りたり

吉見 幸子

同じやうに並べ育てし玉葱も収穫どきはそれぞれのかたち

犬ではない猫とも違ふ足跡の行きつ戻りつの今日わが畑

牧原 正枝

現代学生百人一首

東洋大学

「気に入くわない」ネットに書き込まずいぶんとケンカが下手になったものです

秋田県立秋田西高等学校 二年 西村千咲

「正義って何だろうね」とつぶやいて歴史の教科書めくってる君

秋田県立秋田西高等学校 三年 加藤菜々

木を削る音が身体に沁みついて頑固な祖父は今日も働く

山形県立鶴岡中央高等学校 三年 鈴木陽

新盆の客足絶えぬじいちゃんの歩んだ道の尊さを知る

福島県立磐城桜が丘高等学校 二年 佐藤奈菜

右向け右いつか習ったこの言葉それが僕等の特性なのか

東洋大学附属牛久高等学校 三年(茨城県) 仙田陸海

食べて寝る吹くそれだけの繰り返しオーボエ握る三泊四日

埼玉県立坂戸西高等学校 一年 前田 栞里

部活動打ち込む友を見ていたらリハビリ中の脚動きだす

埼玉県坂戸西高等学校 二年 河井 瑞紀

千年の時越える恋の歌歌人の心に思いを馳せる

埼玉県立松山女子高等学校 二年 岡田 純子

もし僕に翼があれば幸福かそれともそれは重荷だろうか

芝浦工業大学柏中学校 一年(千葉県) 北島 耀

これからは大人のかわぐつはいていく少し痛いがうれしくつづれ

昭和学院秀英中学校 一年(千葉県) 内山 あかり

私の一首

雨の日は雨に寄り添ひ風の日
は風に倣ひて父歩みけり

小柳千美子

「飛び込みましょう。」沈没間際の航空母艦「瑞鶴」の甲板での戦友の一言。そして海に委ねたことで、今の自分が在ると話してくれた。

相談事や祝事、いつも我が家には人が集まっていた。どんな時も、「善かが、善かが」と笑っていた。思い出が浪のように押し寄せてくる。

まふたつに空を分け行く飛行雲夕陽をあびて白く棚引く

林伊佐子

ふる里でみた飛行機雲は山の木々にさえぎられて、長くは見えなかった。しかし、畑仕事を終えて橋の上で見る飛行機雲は、さえぎる物もなく、広大な空に夕陽を浴びて、白く棚引く姿に感動しました。ふたつの空を比較して詠みましたが、独りよがりの歌になって読者に伝えることが出来なくて、反省しております。

株分けをせねばとそのままにスエ先生よりのキンギアナム咲く

平松 裕子

平成二十六年五月号の一首です。読んでみて、何かしつくりしません。字足らずです。実は「せねば」を繰り返して書いたつもりです。「株分けをせねばとそのままに」としたのですが、本になってみたら「せねば」が一回抜けていました。文字の脱落、誤植はリズムが狂ってきます。重ねて申し訳ありませんが「キンギアナム」ではなく「ギンギアナム」です。できるだけ誤植がないように願います。

ころがりゆく白き小さき錠剤の行方ゆくえ見定めわが拾ひ上ぐ

山口千恵子

この頃のむようになつた薬の小さな一粒。とり出しそこなつて落ちてころがっていつてしまった。その行方を目で追ひ拾ひ上げたという。何の意味もないうたです。

薬などには、縁もなく過してきた今までですが、年齢と共に、お医者さまの世話になることもあり、淋しい思いもしています。

『俳句』

朴咲いて犬一匹の留守居かな

松本周二

菖蒲の香分けてすべりぬさつば舟

俄闇天に捧げし朴の花

田水張る筑波二峰をさかしまに

山元正規

田水張る空の蒼さを引き下ろし

万緑や手に乗せてみる副都心

しばらくは極楽にゐる蓮の花

今泉由利

朝顔市花もしほみぬ帰らむよ

小さき実をつけて南瓜の花開く

蚊遣火やルーペ頼りの糸通し

川井素山

一盛の鮑こりこり昼の酒

梅雨寒や明日の天気を寝間で聞く

誰にでも話しかける子さくらんぼ

小柳千美子

家二軒残れる村や枇杷熟れて

ふるさとの同じ氏名や額の花

部屋ごとに紫陽花淡き濃きを活け

重野善恵

梅の実の筈より放つ香りかな

紫陽花を手折りし腕のびしよ濡れて

小雨降る重たき毬の七変化

田中清秀

夏空や池面に映えて青深し

路地裏に枝張り出して枇杷熟るる

二代目の迎へる声の夏暖簾

森岡陽子

片陰に並ぶ屋台の賑やかさ

石垣に夏草生ゆる深き壕

エアコンを除湿につけて冷奴

柳田皓一

教練や一二二と汗ばみて

生い茂る小粒ばかりの庭の枇杷

山肌に光線の帯梅雨晴間

和田勝信

手に取りて枇杷の産毛や祖母の家

五月雨を丸く受くるやガスタンク

裏の木戸気づかぬままに枇杷熟るる

米田文彦

人の字につながる二つさくらんぼ

すべて済みあとは土産の冷し酒

もう充分生きてをりけり昼寢覚

植村公女

パン屑を撒きて広がる雲の峯

三つ編のうなじのホク口若葉冷

かさね吟行会

「我孫子の文人別荘」六月

田中 清秀 吟行記

山元 正規 選句

梅雨である。梅の実の熟れる頃で梅の雨と書いてつゆ、また黴の生える時期なので黴雨とも書く。真夏を迎える前の日本特有の気候現象で古くから俳句では親しまれてきている。迎え梅雨、走り梅雨から梅霖、梅雨時、梅雨じめり、梅雨寒など多くの表現があるが江戸時代には五月雨のほうが季語として使われていたらしい。

平成二十七年六月十二日、梅雨入り四日目いつものかさね同人・会員十一名が揃い、我孫子の文人別荘と手賀沼周辺を散策した。まず、杉村楚人冠の記念館を訪れる。同氏は明治末期から昭和前期に東京朝日新聞で活躍したジャーナリストでアサヒグラフの企画を手がけた先人的な新聞人、当時人気を博し多くの文筆家に影響を与えた。我孫子に別荘を持ち現在は記念館としてサロン・和室・書斎などが邸園とともに公開されている。東郷元帥の直筆のサインのある日本海海戦を伝える紙型（版木）、末松勇の絵画、古い手賀沼周辺の写真、さらに趣味の土中

石の盆石などが展示され古き良き時代の生活ぶりが偲ばれ、暫くの間大正ロマンの時代にタイムスリップする。

梅雨の入り襖絵滲む奥座敷

よく通るガイドの声や夏木立

文人を偲ぶ書斎や走り梅雨

清秀

皓一

文彦

館をあとにして手賀沼方面に住宅街を歩く。柔道家の加納治五郎、志賀直哉を始め白樺派の文人達、実業家の小林力弥、三谷一二など著名人の別荘があったところで閑静な住宅が続く。特に再現された志賀直哉の茶室風の書斎は閉じた杉戸の中で本人がまだ小説を執筆中ではなにか・・・そんな雰囲気か漂ってくる。また、散歩する其処此処に初夏を彩るアカンサスの花、タチアオイ、大きく育ったアザミ、クチナシの花等々が咲きそれに見惚れた参加者が遅れてしまいうほどであった。

夏草に座し語りしか白樺派

万緑や文豪の庵閉ざされて

入り乱るる芭蕉若葉や直哉邸

善恵

京子

勝信

背丈のある葦の遊歩道を抜けてやっと手賀沼に到着す

る。波静かな湖面は遙かに小雨にけむり遠く対岸の木立が遠望され、名は沼であるが実際は大きな湖である。湖岸には公園が整備され、岬からは大橋が見え簀（ひび）が湖水に林立し風景画のごとくである。「帯のように流るる手賀の沼、対岸に模糊たる松林や杉の森、風にそよぐ岸の枯蘆、琴の音に通う松風の音、何処を見ても全くよい」杉村楚人冠の白馬城放語の一節で目前の景色は正にそのままである。

手賀沼の濡れて鎮もる梅雨の入

周二

手賀沼の大橋けぶる緑雨かな

正規

沼辺りをもとほるひと日額の花

陽子

手賀沼は利根川の南岸に長く広がり周囲三十七キロ、面積四キロ平米を越え、昭和三十年頃までは鴨など水鳥が多く生息し、鯉や鮒、鰻の名産地であった。駅にもどる道すがら鰻料理の店からカバヤ焼きの香りが漂い食欲を誘っている。ただ、昼食は当地名物の「白樺派のカレー」といってお味噌風味のカレーライスで志賀直哉や武者小路実篤が当時これを好んで食べたという。これもまた美味しく大正口マンをここでも楽しませてもらった。

味噌入りのカレーライスや夏木立

由利

手賀沼のうの字の旗のゆるる夏

素山

句会是我孫子駅前のかやきプラザにある会議室で行われた。十一階の展望台からは遠く手賀沼の全景が見渡せ多くの市民が読書や将棋でゆったりとくつろいでいた。並んで我々は吟行の景色風景を思い出し囁目三句、自作の最後の推敲に入る。

今回の我孫子吟行も盛会裏に四時過ぎに散会となる、その後蒲焼きの匂いに誘われて幾人かはもう一度湖畔に戻っていったようである。

『酔いの徒然』(四〇)

丸山酔宵子

『長崎龍馬旅情』

前夜博多天神でしこたま飲んだ五月晴れの朝、「ヨシ、世界遺産登録予定のグラバー邸と坂本龍馬の龜山社中の長崎に行ってみよう！」と博多バスターミナルから高速バスに乗って一路長崎へ。

海が眼下に迫る花と緑のグラバー邸の真横、大浦天主堂が新樹の中に堂々とたたずんでいる。1865年(元治2年)建立まもない天主堂は「フランス寺」と呼ばれ、美しさや異国情緒あふれるものめずらしさで付近の住民が数多く訪れた。フランスから赴任していたプティジャン神父のもとへ、突然住民十数名が天主堂を訪れ、「私共は神父様と同じ心であります」とささやき自分たちが

迫害に耐えながらカトリックの信仰を代々守り続けてきた「隠れキリシタン」である事実を告白した。武器調達でグラバー邸をしばしば訪れた好奇心の塊である龍馬も、間違いなく訪れキリスト教にも関心を持ったことであらう。

龍馬が初めて長崎に来たのは、1864年(元治元年)に勝海舟とともに訪れ、「海援隊」の前身である日本で最初の商社龜山社中を長崎湾と市街を一望できる小高い山の中腹に創設したのである。龍馬をはじめ幕末の志士たちが駆け抜けたであろうことから『龍馬通り』となっていて、かなり急な石段が続いている。将に目の前に海が迫っていて、海に向かって下るのも、足ががくがくしてくる。

龍馬をはじめ、幕末の志士たちの健脚は信じられないほどで、やれ長崎だ、京都だ、江戸だと、瀬戸内海は船がメインで移動したとしても、基本は徒歩。龍馬に至っ

ては、京都寺田屋での傷の療養を兼ねお龍を連れて、新婚旅行で、京都から鹿児島霧島まで行っているのだ。龍馬だけではなく、米と味噌と魚が主食の昔の人は、どのようにしてこんな身体能力を持っていたのか、驚くばかりである。

『龍馬通り』沿いは普通の民家が急坂に立っており、綺麗に生垣が整っていて、特にツツジが見事に咲いている。

長崎と言えば卓袱（しっぽく）料理。唯一外国へと港を開いていた長崎ならではの料理だ。海老のすり身をパンにはさんで揚げた「ハトシ」、豚の角煮「東坡煮」などハイカラな料理を、龍馬は「こりゃーうまいぜよ！」と志士たちと酒を飲みながらにぎやかに食べたことだろう。「酒量は量りかねます・・・」今でいう「ザル」つてことで、さらにお龍によれば、「龍馬はひと息に一升五合を呑み乾して、息を吐く事虹の如しでした・・・」。

龍馬通りを下り、寺町、眼鏡橋、オランダ坂、中華街を過ぎれば思案橋のネオンが今かと迎えてくれる。さあ今宵は「何処で一献・・・」とぶらり思案橋の楽しい時間の始まりである。

海迫る龍馬通りにツツジ咲く

酔宵子

ある自然科学者の手記 (39) 大橋望彦

状袋表面

陸奥国 田名部町寓

鈴木故丹下殿

御家族様

駿河台鈴木丁

十七番屋敷

野田 豁道

要用

田名部を立ち退くに就いては、祖母の亡骸を其の儘には出来ません。是非共会津の墓所へ改葬致し度う御座います。又国許へ残してきた品物もありますから、一旦会津に立寄り、其の上で上京という都合にするのが宜敷からう、幸い野田様の御許しもありましたので、夢にも忘れぬ故郷への旅仕度に掛かりました。

さて、船にしようか、陸を行こうか、此処へ来る時は皆船で懲り懲りして居りますから、日数が掛かっても、陸路を採ることに決めました。然し、長旅に女子供ばかりでは不安心故、適當の連れをと尋ねました所、丁度家中の玉上新治郎という人が家族連れで会津へ参られるので、御同伴を願ひ、大変好都合で御座いました。

扶持離れに付き、一時金を八円宛て戴きましたが、之を旅費に使つては、後々の準備に困りますので、その金子は貯えて置き、戦争の節持参致した簪かんざしや、綴れ錦の煙草入、其の他金目のものを、万が一の容易に保存してありましたが、落ちぶれては、入用の品では御座いませんから、欲しがる者の在るを幸い、売り払つて旅費に充てる事に致しました。

『懐かしき会津への旅』

南部に移りましてから、四年になります。言い知れぬ苦勞と辛酸に人間としての不幸の限りを尽くした田名部の地でも、離れるとなれば、名残りの惜しまれるものです。土地の人々は、質朴で正直、親切に親類兄弟の様に交わつて下さいましたので、何時又会えるか解らぬ遠方へ、旅立つとなれば、別れを惜しみ、涙無しには居られません。十月初め、愈々出立と言ふ時には、大勢町外れまで、見送つて来られ、姿の見えなくなる迄立ち尽くして居られます。

横浜へ一泊し、野辺地へ着き、縁故の深い三ツ星家を訪ね、一部始終を語りますと、此処でも名残を惜しまれ、せめて二三日逗留する様にと、勧められます。玉上様は、『五ノ戸のお待ちする』と、出立されましたので、私達は三ツ星家の御好意に甘え、同家へ二晩御厄介になりました。

其の時、父の形見の懐中時計を五円で、三ツ星家にお売り致しました。同家の主人は、此の時計は鈴木家大切な品、一時お預りは致しますが、五円お払い下れば、何時でもお返し致しますと申されました。其の上、何程かの金子を饒別として恵まれ、馬で行くよう乗馬等を何呉れとなく、お世話下さいましたので、此処でも又別離の涙にかきくれたので御座います。

涙ながらに、野辺地を出で、二三里参りました時、私の馬は、至極慣れて居りましたが、母と伯母の二人の乗馬を並べて繋ぎました為か、伯母の馬が暴れまして、母と伯母の二人共、

振り落されて仕舞いました。母は左程ではありませんが、伯母は腰をしたたか打ち、立居に痛みを覚えます。一同顔色を変えて心配致しましたが、漸く三本木に柳田と申す親戚があるのを思い出し、この家を訪ねて、応急の治療を受けました。三本木、五ノ戸付近は一面の荒野原でありましたが、田名部付近の恐山山麓の火山灰地よりは耕作が出来ますので、旧会津藩士が続々と移住致しまして、今では会津藩士の農家で立派に開墾されて居ます。

五ノ戸に着きますと、玉上様が約束通りお待受け下され、その上其処から会津へ行く連れが増えまして、都合十六名になりました。その内私が一番年高で子供が六人、賑やかな団体旅行です。

五ノ戸には宿らず、二里ばかり先に朝水と言う村へ泊まり、夫れより三ノ戸、金田市、福岡等に泊まりを重ね、『末の松山浪こさじ』と、古歌にある浪うち峠を越し、一ノ戸村に宿り、中山と申す所へ着きました。

此処は、誠に酷い山中、人里とても遠く、人家は僅かに二軒しか御座いません。その家も、荒れ果てて汚く、食物は藪くさぜんまい位の物で、御飯は黒米、何分にも喉へ透りません。丁度粟がありましたので、大鍋で茹で、之う御飯代わりとして食べました。然し、田名部の最初の暮しに比べますと、勝るとも劣らぬ程で、彼是と贅沢を言えた義理では御座いません。

おこ内、宮内に宿り、九日目に漸々と盛岡に着きました。此の所からは船で北上川を下れば、石巻まで二日二夜で行けます。船賃も一人前壱円拾銭、賄い付き故、陸路より早くて経済的ですから、川船に乗る事に決めましたが、船中食べ物に不自由と聞き、煮豆等を買ひ求め持参致しました。

川船は、誠に小さく、私共十六人と他に十人程の乗り合いが有りましたので、まるで鮪詰め同様で御座いました。賄いと申しましたが、御飯を箆ざるに入れ、朝夕は生味噌、昼は沢庵一切れ丈、又多人数の中へ、飲み回す訳で御在います。寝ようにも、布団一枚無い始末です。おのぶ(妹)の為、敷布団と四布の掛け布団一枚宛て持参しましたのを幸い、一枚を子供が敷き、一枚を十六人の連中の足丈に掛け、布団一枚に足三十二本と一同大笑いを致しました。夜は、この土地で用います、『折檻蠟燭』と言う松の根を竹の皮で包んだものに、火を付け、灯火としましたが、其の儘に放っておいては、暗くなりますので、時々其の火を敲きます。『折檻』と言う名は、これから起こったのだそうです。

其の夜は、郡山へ船を着け、一泊致しましたが生憎雨が降り出しましたので船待ちし、二日目に漸く漸く黒澤尻、夫れより其所彼所と船を着けて、北上川の落ち合に在る衣川に参りました。此処は、名高い衣川の旧蹟ですから是非見物しようとして、一旦船を降りましたが、相当遠いので思い止まり、五日目に水沢へ着きました。此処は県庁の所在地で町も綺麗です。殊に、其の日は十月十七日の大祭日で、軒毎に翻る国旗を始め見ました。南部の果てから出てきた者が始めて見る国旗、その神々しさに打たれました。又銭湯屋に行った所が、五色の硝子戸があり物珍しく驚きました。旅館で昼飯を戴きますと、豆腐汁が出ました。何年振りの事やら、その美味しかった事、未だに忘れません。煉瓦石も此処で始めて見、見るもの聞くもの珍しいものばかり、この分では、東京へ行けば肝が潰れて無くなるかもしれぬと、大笑いでありました。

絹の話 (57) 「アトリエテレビ」今泉雅勝

絹と武士の台頭

「桂女が時代(日本の染織)をリードした」

平安時代が終わり、鎌倉、室町、戦国時代と世の中が移ろって来ると、自由闊達な衣装が求められる様になり、十二単の様な重ね着や長い袖など省略され、内着であった小袖が表着となつて来て、平安時代下級公家が活動的に仕事をする為の狩衣が、いつの間にか武士達の正装になりました。

次第に宮中の財政も細くなり、御用を承り、それが故の特権を与えられていた染織の人々にも不況の風が吹いて来たのです。彼らは従来の様な宮中からのお金に糸目を付けない特注だけでは生活出来なくなつて来たので、京に住み始めた新たな金持ちの所に、今まで培つて来た技術を駆使した鮮やかな衣装などを訪問販売する様になりました。特に桂女達の時代を先取りしたデザイナーの衣装と衿を折り曲げて中の真つ赤な着衣が鮮やかに見える様な斬新な着こなしは、京は言うに及ばず全国諸大名の耳目をも驚かせた様です。台頭しつつあつた婆娑羅大名

などはこの様な風流(派手に着飾る事)をいち早く取り入れたと思われれます。

応仁の乱(1467~77、足利將軍家の跡目相続を廻る東西二軍に別れた大乱、以後群雄割拠戦国の世となる、三河アララギ発行人の今泉由利氏は応仁の乱に敗れ、三河の国に落のび、丹野城を築いた萩原左衛門尉芳信の子孫)以降世間が平穏を取り戻して来ると、当時神社境内の市や祭りに色鮮やかな衣装を着て踊る事が流行になりました。その頃はこうした事を「風流」と言っていたようで、今日とは随分違つた意味合いだったので。辻が花染(縫い絞め絞りを主とした絵模様染めで、描画、摺泊(金泊や銀泊を糊や漆で生地につける)、刺繍等を施した極精緻なもの)もこの様な時代を背景に誕生して来たのです。

戦国時代のさなか、出雲の阿国が派手な出で立ちで京の都で歌舞伎踊りを興行し、大受けに受け、今日の歌舞伎に至っています。織田信長、豊臣秀吉の派手な衣装好みも時代の申し子と言えましょう。

「信長、秀吉の衣装への執念」

織田信長は進取の気性に長けた武将であつた様です。

平素は破天荒な出立ちで、旧弊にとらわれず、大勢の家臣を従え、山野を駆け巡りながらながら、一朝事ある時は正装に着替える柔軟な対応力を持つ信長には、京風を重ずる今川は所詮敵ではなかったと思われまます。

日本で棉が貴重品の時代、棉と藍の栽培を奨励し、雑兵にも棉の服を着せ（制服の概念の導入）、楽市楽座を設け流通経済を活性化させ、流通税を得て隣りに覇権を手にして行くのですが、自己表現の衣装の蒐集も驚くべきものがありました。

有名な「馬揃え」の時、絹帷子（カタビラ：練っていないシャリットした生絹で仕立てた単衣の着物）を抜き下げ（能装束の着方で、右肩を抜いて垂らして着る）に着て、袴は金襴（錦織の斜文組織に金糸を織り込んだ物）か刺繍の施された緞子（たてよこ糸が練絹で軟らかく艶があり今日の厚地サテンの様な織物）を履いていた様です。歌舞伎役者をしのぐ華やかさでしたでしょう。

衣装のコレクションも、中国の明や南蛮船からもたらされる金襴、緞子、縞子は言うに及ばず、毛皮のマント、切り子ガラス、羊皮獣毛など目を見張る物が有ります。

この頃、市中には小袖屋が出来はじめ、一般にも取り入れられて来ました。今日の呉服屋の始まりです。信長

は尾張清州の伊藤忽十郎を商人司に任命して中国の輸入呉服と国産呉服を差配させました。これが今の松坂屋百貨店の始まりです。

応仁の乱で地方に逃れていた職人集団が京に戻って来て白雲村と称して高級な練絹（たてに生糸、よこに練り糸）を織り始めたのに対して、山名宗全の陣跡（西陣）へ復帰した大舎人の集団が新しく人気の綾織、金襴、緞子など、この時代に渡って来た中国の職人から最新技術を学んで、中国を凌ぐ織物を作り始めたのが、今日の西陣織なのです。

豊臣秀吉はその様な主君のいでのたちによる対人圧倒述を身をもって体験していて、自身の生い立ちを凌駕する為にも信長以上に豪華絢爛たる衣装の蒐集に狂奔したようです。その象徴はベルシャ絨毯を陣羽織（京都高台寺蔵）にした事や、醍醐の花見の屏風図（国立歴史民族博物館蔵）の秀吉の姿を見ても判ります。

この時代でも舶来の絹は誰しも垂涎の品であったので、秀吉はマカオを経て長崎に入港するポルトガル船の積み荷の生糸を買占めさせたり、鹿児島や土佐に漂着したイスパニア船の生糸や織物を取り寄せています。此れ等の品は大名間の答礼、下賜品に多く使われたようです。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 四十七回

「月虹」 鮫島 満

二十二 板垣家子夫 7

「老いし歯」は造語ならむと言ひをりし茂吉先生に
その歌二つ

『湧水』昭和五十三年
牛の肉噛むに痛むをなげかれて老いし歯の歌成させ
給ひし

歯を患める茂吉先生がせし如く肉を呑みこみぬ吾が
歯痛むに

茂吉は数年前から歯痛に苦しんでいて、大石田にても
歯科医院に通っている。板垣は〈随行記〉に「午後から
歯科医に行き、昨日切開してもらったところに塗薬して
もらい」（昭和二十二年三月五日）、「午後神部歯科医に
行って塗薬の手当してもらい」（同六日）と記している。
そして八日には、「私に、老いし歯すなわち老歯は造語
かも知れないと語ったことがある。今まで誰も『老いし
歯』という詞を使って歌を作ったものがない、とその
時言っていたのを思い出した」と書いている。これが右
の一首目の歌になっているのである。

一首目に「その歌二つ」とあるのは、「老いし歯にさ
やらば^錠錠に呑めあら尊と牛肉一片あるひは二片」「老い
し歯の痛みゆるみしさ夜ふけば何といふわが心のしづけ
さ」（『白き山』）のことである。

板垣はこの年もう茂吉の年齢を超えていてやはり歯痛
に苦しんでいたらしく、茂吉にならって肉を噛まないま
まで呑みこんでいる。それを詠んだのが三首目である。

年重ねいろ黒く変り味枯れの味噌ことのほか好み給
ひし

『湧水』昭和五十四年

茂吉が味噌を好んだことはよく知られており、詳しく
は拙著『ふる里の味噌はよき味噌—斎藤茂吉の〈食〉の
歌—』にある通りである。ひと言つけ加えるなら、茂吉
は東京で高等学校の受験準備に専念していたころ、山形
から上京する人に味噌を持ってきてくれるよう頼んでお
り、また、短歌を本格的に始める前に習作として「味噌
歌十首」を作っている。

疎開の茂吉を書くに孤独また流氓等々多くは文飾用
語にて

『湧水』昭和五十六年

研究者や評論家が茂吉の戦中の金瓶疎開や、敗戦後の
大石田移住を論ずるときに好んで用いた言葉として「孤

独」「流亡」「流氓」等があった。板垣はそのような用語を、決して茂吉を正しく言い当てたものではなく、「文節用語」に過ぎないと憤りをもって詠んでいるのである。戦争責任を問われることもあった茂吉の疎開時代の身辺にあつた板垣にして言うことのできる感想であろう。

うつしみの人にあらざる君と見ゆもの言はずみ声聴く姿勢にて
『湧水』昭和五十六年

籠るごと桜落葉の下影にみ像となり在すたふとさ

多少似る似ざるさもあれみ像を仰ぎ会ひまつる涙ぐ

みつつ

背負はれて再び三たび胸像をめぐりてもらひわれ去
なんとす

題に「斎藤茂吉先生像建立」とある。すなわち昭和五十六年五月に上ノ山の斎藤茂吉記念館前に建てられた茂吉像除幕式でのことを詠んでいる。死の前年にあたるこの年、板垣は、四首目にあるように、また、「花持ちて車椅子に押され行く吾れに『茂吉先生の墓にがっす』という別の時の歌にわかるようにもう自力では歩くことができなかったようである。

敬ひて慕ひ給へる蔵王山に对ひまさぬを吾は口惜し

む

同

蔵王山に对ひみ像建つるすら思ひ至らざりしわが悔い残す

この二首は茂吉像が、板垣の心を代弁すれば「こともあろうにあの蔵王山に背を向けて建っている」ことへの嘆きを詠んでいる。二首目には、まさかこうなるとは考えもしなかったが、そんな心配があるのならひと言申したのに、という悔いを詠んでいる。

塩ノ沢観音堂に精薄の若き乞食と親しまれぬし

『湧水』昭和五十七年

精薄の乞食の保てる純直を愛しみ仮眠しけむ山のみ堂に

先生が東京に帰りし語られて去りし乞食をその後見かけず

この年に亡くなる板垣の最後の茂吉詠である。茂吉が時には板垣を伴うことなくたびたび訪れた塩ノ沢観音堂を詠む。「精薄の乞食」のことは茂吉の塩ノ沢詠には詠み込まれないから、これはひとつのよい資料になるといってよい。板垣は〈随行記〉に「観音堂には番人がいないので、夜になると乞食の何人かが戻って来て住んでいる。それでも感心に堂宇の中はいつも清潔であるということだ」（昭和二十一年）とも記している。

楽しい時間 33

山本紀久雄

2015年6月30日

手仕事への回帰(1)

前号で「カンボジアに絹緋の森をつくった日本人」の森本喜久男氏を紹介し、森本氏の活動を突き詰めていくと「自らが関心を持つ分野について、それを深く掘り下げ、他の追隨を許さない特化したシステムづくり」という経営セオリーに合致していると述べた。

今回は、森本氏と同じ思想で行動し、我々の意識原点分野について、警告を発している一人の人物の主張を紹介したい。そのタイトルは「手仕事への回帰」という、見慣れない言葉である。

我々はビジネスでは勿論、家庭生活でも生産性を上げることに注力している。

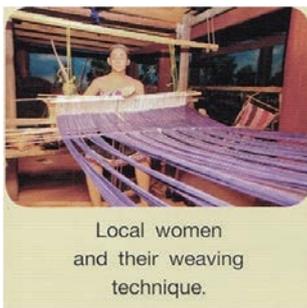
また、それらを後押しする新技術が常に開発され、世の中に提供され続けている社会の中で暮らしている。「手仕事への回帰」といわれてもピンとこない。

だが、ある人物と東北タイの地で会い、個別事例としての「特殊性」から、世の中セオリーの「普遍性」にし、今の人類へ忠告を提言している姿に同感したのでお伝えしたい。

東北タイ(イサーン)コンケン Khon Kaen 市立博物館にて

2015年2月6日(金)、バンコクから北東へ約445キロメートル。イサーンの中心となるコンケン県のコンケン市に到着した。

ここにはホーン・ムーンマン博物館 Hong Moon Mung Meung がある。コンケン市のある場所として、2003年に設立された。イサーンの方言で「ホーン」と言うのは大きな倉庫又は会館と言う意味で、「ムーンマン」は宝物のこと。したがって、ホーン・ムーンマンは巨大な宝庫と言う意味になる。



Local women and their weaving technique.

館内は、第1ゾーン 全体紹介、第2ゾーン 歴史及び文化、第3ゾーン 市の由来、第4ゾーン 町と人々の暮らし、第5ゾーン 現況、と結構よくできている。その第4ゾーンには、左写真の展示、女性が織機を動かす織物を織っている姿があり、その背後に位置するひと



つの展示ケースの前に立つと、黒づくめの服装の人物が説明を始めた。その人物とは国立民族学博物館の吉本忍名誉教授である。

「これが何かかわかりますか」と、展示ケース内のある木造物を指さす。尋ねられた側は当然にわからない。

「以前にここに来て、これを見つけ、この学芸員に尋ねたが、これがどのよう



うに使用されるものか、わからないと発言した」
「ここに展示してあるということは、この物体を理解している学芸員がいて、その重要性に鑑みケース内に収めたはずだが、時間の経過とともに、この博物館の学芸員でも展示物の説明ができなくなっていく。これが世の中の現実だ」と嘆かわしそうに眉をひそめる。

そして、「その後の現地調査によって、これはタテ糸のあいだに通したヨコ糸を打ち込むためのヨコ打ち具で、むしろヤゴザを織る原初的な織機の部品として使われてきたということがわかってきました」

と言うや、さっと手に持ったパソコンを開き、これと同じ道具を使ってゴザ織りをしているラオスで撮影された写

真や、編著『世界の織機と織物』（発行：国立民族学博物館）をあげ解説してくれる。



この『世界の織機と織物』はすごい。世界中の織機について調査し解説してある。

因みに、先の道具と同種のもの、この本で「ゴザを織るために使われていたラオ（ラオス）の櫛状ヨコ打ち具（国立民族学博物館蔵 H025418）」（同書 159頁）として紹介され、同種の道具をそなえた東北タイの織機は、枠機Ⅰとして同書の資料篇 174頁に詳細に記述されている。（左写真は枠機Ⅰでゴザを織るラオの女性・2008年）

当然に専門外には理解できないことが多いが、『世界の織機と織物』の該当頁の写真と図と解説に目を通すことで何となく察することができる。

とにかく、吉本教授は熱心である。相手がわかっていても、いなくても情熱をこめて説明してくれる。

それを聞いてみると、最初はちんぷんかんぷんだったはずが、そのうちに少しずつ分かってくるような気分になるから不思議だ。

明確には分からないが、イメージとして理解できていくような気になっていく。続く。

楽しくマナー ②

辻 照子

焼酎をお洒落に

クラスの始めに、4種類（さつまいも、麦、米、黒糖）の焼酎を、ちよつとおしゃれに試飲する。ロクク、水割り、ハイボール、ジュース割り、お好みにはアレンジして。色とりどり赤（海童）、琥珀（傳蔵院蔵）、白（白岳）、黒（黒糖）のボトルがともきれいで、テーブルが華やかになり、料理との相性が良く、食中酒としても美味しく飲むことが出来ます。

ディナーを招待されたラスベガスのレストランでカクテルグラスに注がれた梅酒を食前酒としてサービスされた。乾燥した砂漠の上に造られたきらびやかな街に建ち並ぶホテルにはカジノに興じる観光客はもろろん、会議やイベントをする為に多くのビジネスマンが忙しそうに往き来している。男性達が会議中、カリフォルニア在住のアンさんにラスベガス周辺を案内してもらいました。会議で何度も



訪れている夫なのに、後にプライベートでラスベガス観光をしたとき、私のほうがおすすめポイントに詳しくてびっくりしていました。

焼酎と梅の香のおしゃれな食前酒を飲みながら、光り輝く夜景や豪華絢爛な噴水も良いけど、季節があり緑の自然が美しい日本はやっぱり「いいなあ」と思うのです。

カジュアルな焼酎は楽しく和やかに飲むのがよい、今回のマナーは、日本語の知っておきたい言葉遣いについてお話しします。

「目上の人への言葉遣いのマナー」で誤りがちな表現をいくつか説明。緊張すると敬語を意識するあまり、過剰敬語になってしまいがち、例えば「お帰りになされました」は「お」と「れる、られる」の敬語が二重になっているので「お帰りになりました」又は「帰られました」で、「おっしゃられました」は「おっしゃいました」で、「ご覧になられます」は「ご覧になります」。

尚、「了解」や「ご苦労様」は目上の人を使う言葉、年下を使うと失礼になるので次のように表現する「了解しました」は「承知しました」、「ご苦労様でした」、「ありがとうございます」又は「お世話になりました」、「一緒に参りましょう」は「一緒にさせていただきます」、「お聞きしたいことはありますか?」は「お尋ねになりたいことはありますか?」、「一緒に勤務しています」、「申された件ですが」は「おっしゃった件ですが」など等。日本語は難しいが正しく使えば実に美しい言葉です。しかし敬語を気にするあまり会話が弾まないのは困りもの、相手に対する礼やねぎらいを忘れず、「Time（時間）、Place（場所）、Occasion（場合）」に合わせて会話をすれば少々の失敗も許し

てもらえると思う。敬語の表現も言葉も時代とともに変化してきて、そしてこれからも変わってゆくでしょう。。。

フランス語も目下の人や仲間同士で、親しみを込めて使う言葉があります。「vous」も「tu」もあなたの意味ですが「tu」は目下や親しげに話す時に使います。「名前は何というの？」は「Comment vous appelez-vous?」を「Comment t'appelles-tu?」と。ある日、幼稚園のお迎えの帰り道、娘の友達に「vous」で表現して名前を質問したところ、きょとんとしていた。すると娘が「tu」に直して聞いてくれ通じた事がありました。アクセントが悪かったり、ボキヤブラリが足りなく、会話が成り立たないとき何度も娘に助けられたのでした。

「ファルシーの意味はなんですか?」。。。フランス語で「詰める」を意味する動詞ファルシ (farcir)、詰め物料理のこと。で英語ではスタップドと。この日のレシピは玉ねぎがたくさん、血液サラサラになって暑い夏を健康に過ごせることでしょう。

■オニオンのファルシー

材料(4人)

玉ねぎ(中) 4個 合挽肉 120g プチトマト 8個 醤油 小さじ2

A(卵1/3個 塩・こしょう少々) B(ブイヨン 1/2個水200cc オリーブオイル少々)

作り方

①玉ねぎは上部を切り、スプーンで中をくり抜く。くり抜いた玉ねぎはみじん切りにしてレンジに1分30秒かけて冷ます。

②ボウルに合挽肉とAと玉ねぎのみじん切りを合わせ粘りが出るまで混ぜ玉ねぎに詰める。

③鍋に②とBを入れ蓋をし、トマトも加え弱火で15分程煮、醤油で味を調える。

■彩りパスタ

材料(4人)

グリーンアスパラ 4本 パプリカ赤 1/2個 玉ねぎ 1/2個 ベーコン 2枚 スパゲッティ 160g

オリーブオイル 大さじ1 豆乳 100cc 粉チーズ 小さじ2 醤油 小さじ2 しょう油 少々

作り方

①アスパラは斜め切り、玉ねぎは薄切り、ベーコン・パプリカは細切りにする。

②スパゲッティをゆで、茹で上がる少し前にアスパラを入れさつと火を通し、湯を切る。

③フライパンにオリーブ油を入れ、ベーコンと玉ねぎを炒め豆乳を加えて煮立たせ②と、パプリカを加えて和え、しょう油とこしょうで味を調え粉チーズをふる。

■ポテトの明太子和え

材料(4人)

じゃがいも(大) 2個 明太子 小1腹 みりん 小さじ2 焼海苔 1枚 カイワレ 1/2パック

作り方

①じゃがいもはレンジ(100g 12分)にかけ、皮をむき粗くつぶして、皮を取りみりんを混ぜた明太子で和え、カイワレと千切りにした焼海苔を散らす。

「歴代天皇御製歌」(三十九)

賈名海屋資料館

「堀河天皇」第七十三代・在位一〇八六年(八歳)―一一〇七年(二十九歳)

堀河天皇は、白河天皇の第三皇子。八歳で即位され、父・白河上皇の院政がはじめられた。堀河天皇は、音楽、管弦、和歌に秀でられ「讃岐典待日記」がある。堀河院歌壇を形成され、「堀河百首」「堀河後度百首」。

神代よりながれ絶えせぬ河竹にいろます言の葉をぞ添へける

続後撰集

しきしまや高田山の雲間よりひかりさしそふ弓張の月

新古今集(三八三)

「歴代天皇御製歌」(四〇)

貫名海屋資料館

「鳥羽天皇」第七十四代・在位一一〇七年(五歳)―一二三三年(二十一歳)

鳥羽天皇は、堀河天皇の第一皇子。祖父・白河法皇の院政が続いて行われていて、若い間だけの在位で、三十四年間を上皇とられた。殊のほか佛教を崇信された。

心あらばにほひをそへよ櫻ばなのちの春をばたれか見るべき

千載集(一〇五二)

ふたたび春をみることはないだろう…

つねよりもむつまじきかな時鳥ほととぎすし死出の山路のともとおもへば

千載集(五八二)

時鳥が鳴いて冥途へ付き添ってくれることだろうよ

落柿舎と三尾

夏目勝弘

芭蕉の生誕地、伊賀上野を巡り、いま少し芭蕉の俳句の深意を知りたくなる。

それも最後に辿り着いた境地の俳句。

○清瀧や浪に塵なき夏の月

○清瀧や波に散り込青松葉

この句の詠まれた元禄七年六月（新暦七月下旬）に行くこととし、少し調べなくてはと思い「松尾芭蕉論—晩年の世界」福田真久著にヒントがあるとと思い参考とした。

まず五万圓の右京区を拡大コピーし著者の歩いた道を確認。落柿舎から下清瀧（落合）から上清瀧まで、三キロ余り。

最後の句に辿り着くまでにも

○此の秋は何で年よる雲に鳥
○行く春や鳥啼き魚の目は泪

のように禅の一転語的な語句がある。芭蕉が三十七歳のとき、深川の臨川庵で仏頂和尚の元で禅の修業をしたとある。

いま原稿を書いて居る机の透明のマットの下には、芭蕉の言葉の抜き書きが並べてある。

いつどの本から書いたかは忘れたが、俳句も短歌も同じ定型の短詩ゆえと思ひ書き写しいつも目に付く机に置いてある。その言葉とは

○定型のなかに宇宙を封じ込めること

○有限なる世界に生きそのなかに無限なるものを発見すること

○限りある生命のなかに悠久の生命を発見すること

○美とは後天的に感ずるものでなく先天的に知っていることである。

○美を司る神霊精霊たちの呼吸を感じとること

芭蕉が禅の修業を重ねて得た何かがこの言葉のなかにあると思つてゐる。

芭蕉が禅との関わり、清瀧は古典和歌に関係も深い。西行法師の清瀧の一首等を思う。

○ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清瀧川の水の白波

清瀧の上流には禅にとつて大切な地三尾がある。高雄、樞尾、梅尾この地はかの明恵上人の修行の地でありぜひ一度は行ってみたいと思つてゐた。

明恵上人については、岩波文庫ワイド版の「明恵上人集」により少し勉強してゆく。

伝記によれば生れは紀伊国在田郡石垣の吉原村（和歌山県有田郡金屋町歎喜寺）

承安三年（一一六三）正月八日辰の剋日出の時に誕生。

京都高雄の文覚に師事、東大寺にて華嚴を修業、一二〇六年梅尾高山寺を建立、榮西と親交あり、榮より持ち帰った茶種を植えて繁殖をはかり「本の茶」の名を得た。

明恵上人夢日記というのがある。その始めは十一歳のころと思はれる。夢日記より。

同廿五日、釈迦大師の御前に於いて無想を修す。空中より文殊大聖現形す。金色にして獅子王に坐す。其の長、一肘量許り也。から夢日記は始まつている。

一一九五年から一二二〇年の間に百二十余の夢が鮮明に記載されている。

自分などは二十代より今までに四つのみ絵に描けるように思ひ出される夢を見ていない。その霊能力を想像するのは無理である。

明恵上人の「遣心和歌があり、そのなかの清瀧に関わる一首を記す。

○清瀧の瀬々のいはなみ高雄山人もあらしの声ぞさびしき
落柿舎および三尾で何かを感じとりたひ。

「氷魚」のことから (175) 岡本八千代

今日は、庭の白い紫陽花の花に梅雨が雫している。この頃になると、御津磯夫先生、奥様、親しかった友だちのことを思い出す。なぜか、この頃に天に召された三河アララギの方たちよ。きつと私を、「今月はどんなこと書くの」と見ている下さるような気がする。

そう、この間(6月11日の男子サッカーの日本対イラクのこと書こう。日本が4対0で勝った時、ハリルホジッチ監督は、「選手たちは、高いレベルの美しいプレーを見せてくれた」と喜びの言葉だった。私は勝負の世界でも「美しい」という言葉を使われたことに感動した。詩心と共通してゆくような?。

さて、今回の子規のこと書くにも、この感動のまま書いてみたい。

子規全集第九巻(月報21)の水木直箭という人の家に残されていた当時の松山中学校時代の子規達の成績表があつて、それを水木氏が発表された原稿をここに載せた。

当時松山中学校は予科を経て初等科八級に始まり、一年間に二級ずつあがつて、一級を卒えると高等科四級に進んだものらしい。初等科で四年、高等科で二年学ぶわけである。学年も九月に始まり、翌年七月に終わった。

この表は、子規の得点を抜き出している。

△明治13年7月大試験表

小試験	洋読	洋問	漢読	漢問	数学	文章	総計
26	33.5	26	20	16	28	15	164.5

△明治14年2月大試験表
七級(12名中、子規は第5席)

小試験	洋読	洋問	漢読	漢問	数学	文章	総計
27	30.5	15	33	12	20	9	146.5

※小試験は前期の大試験後毎月行われたその平均得点。小試験と洋問は30点満点。洋読と漢読と数学は35点で、漢問は30点。文章は15点。総計200点が満点。子規はいかがかな?

△明治14年5月臨時大試験採点表
六級(15名中、子規は第6席)

小試験	英文講読	漢文講読	数学	支那歴史	地文	合計	平均点
82	96	95	86	80	45	484	81

※この試験から、各科とも100点満点となった。

△明治15年2月大試験採点表

五級(11名中、子規は第2席)

小試験	英文講読	漢文講読	数学	支那歴史	図画	合計	平均点
86.5	93	79	82	69.5	100	610	87.5

△明治15年7月大試験採点表

四級(7名中、子規は第3席)

小試験	英文講読	漢文講読	代数	物理	生理	図画	合計	平均
90	92	92.5	100	88	63	100	625.5	89.5

△明治16年2月定期試験採点表

初等二級(8名中、子規は第2席)

日数	終身	漢文	英語	代数	幾何	歴史	生理	化学	経済	図画	平均点
96.5	93	93.5	95.5	83	93.5	78	85	92.5	93	97.5	91

すばらしい成績ではないか。しかし彼は明治16年5月松山中学校を中途退学して、上京するのであった(次回へ)

ことのはスケッチ(44) 今泉由利

『天田愚庵』⑦ 年譜

△明治三十二年(一八九九年) 愚庵 四十六歳

○山口誓子全集中、「愚庵の徳利」より。祖母が家に愚庵さんの徳利があると。それは口が細く、ふつくらとした徳利。口に近く把手がついていた。全体は白地、藍で万葉仮名の歌が書かれ、高さ六十寸五分、胴囲が九寸四分。たつぷり三合の酒が入る。

山口誓子の祖父、脇田氷山へ、愚庵からの贈り物であり、一緒に酒盛りをされたことでしょう。

「愚庵の徳利」に書かれている歌。

①羽雁鳴物戸葉家門琴菜櫛吹串耳勿飲馬鮭遠夢

②酔杉葉婦也投嚙木綿吳爾古農人壺乎蚤莫越夢

①酒は量なしとはいえ、ものを言うのも笑うのも苦し

いまでに飲み過ぎすなかれ

②酔い過ぎは妻が嘆くだらう、晩酌にこの一壺以上飲

みこすなかれ

○古事記中巻に載る「心神天皇御製歌」。
須須許理が醸みし御酒にわれ糸ひけり事_{こと}和酒_{わしゅ}咲酒_{さけしゅ}にわれ糸ひにけり

○「愚庵詠草」に、明治三十年夏、古事記の「心神天皇

御製を敬誦した愚庵の和歌。

○すめらぎは神にしませばすゝこりがかみし御酒に酔ひませりけむ

愚庵の徳利の、万葉仮名の和歌に至る。

○愚庵全集「観人節酒」

三合面堪醺 一壺神自暢

顛然乃乱時 勿道酒無量

量を過して「乃乱」しないよう、酒の節すべきことを勧めている。

○愚庵は、いつの頃からか酒を断っていた。大阪内外新報社当時はたいそう酒を飲んでた。

○山岡鉄舟、身の丈六尺二寸(約百九十センチ)体重二十八貫(百五キロ)。斗酒なお辞することがなかつたという。愚庵も相手をしたことだろう。

○一月二十日、滴水禪師示寂。行年七十八歳。

○春。吉野に遊び。十日間逗留。

吉野観桜短歌五十首の連作を詠む。

奈良坂経多武が嶺越えて三吉野の吉野の山の花見にそ来し

見む人は早も来て見よみ吉野の花の盛は今日明日と知

鹿_か自_じ物_{ぶつ}膝_か折_りふせて御陵の御前に居れば花そ散り来

川上の舟生の祝が振る鈴の音のかそけく聞えつるかも
○八月、愚庵に万葉の魂を教授した丸山作樂没。六十歳。

△明治三十三年（一九〇〇年）愚庵四十九歳。

○早春、明治天皇御陵地選定のため入洛した品川弥二郎
と共に、伏見桃山に観梅。

○二月二十六日。帰京後、品川急逝。五十九歳。

○伏見梅林。品川弥二郎と観梅の短歌。

梅の花散りもはてぬに見し人の野辺のけふりと消えに
けるはや

○かさねきて独り眺めつ梅の花昨日は君と見つめてし
を

○六月。愚庵自ら設計。工事監督に当り、伏見桃山に新
庵を起工。

○七月末、新庵竣工し、伏見桃山南麓、指月の杜に移り
住む。

○打日指京のうちをことしげみ伏水の里に我は来にけり

○三吉野の吉野若杉丸木柱にきりてつくるこの庵

○斧とりて急げ工等久方の雨降らぬ間につくれ此庵。

○臺には黄金をふきし桃山の高城の跡にいほりす我は

○工等よ今日の日よりを徒に過くしていつか棟上げはせ
よ

○よき月の今日のよき日を桃山の我庵つくる今日のよき
日を

○「桃山結廬歌」

○武夫の八十氏川の流には流れもつきぬ名ぞ流れたる

○遠山は葛城の山志賀の山生駒の山のいただきも見ゆ

○近山は宇治の高山短山小幡笠取八幡山崎

○青丹よし奈良の都の春日野の春日の山も霞みてぞ見ゆ

○法兄、峨山没（天竜寺再建）哀悼歌。

○遅るるを思ひ知らぬは我背子がほりにし松を遣らて悔
しも

○形見にと思ひしものを思ひきや君か手向けに今日植え
むとは

○この年、知友、三遊亭円朝没。

○夏目漱石、英国留学。

○野口英世、渡米。

○津田梅子、津田塾大開設。

△明治三十四年（一九〇一年）愚庵四十八歳。

○健康思わしからず、五月五日、遺書を認む。

○七月二十日、羯南、中華・朝鮮漫遊のため西下の途次
来訪。

○九月上旬、国分青崖来訪し、暫く滞在。

○「明星」を中心に恋愛詩歌が流行。

編集室だより【二〇一五年 六月】

☆三河アララギ賞 近藤映子様

子供の日母の日もあり皐月晴れ八十路を告るわが同級生

まわりの方々をやさしく気遣われるご様子を上手にリズムカルにまとめられ、流石です。

○梅雨の原因を知りたい。インド洋の湿った大気が、ヒマラヤ山脈ぶつかり、チベット高原の北と南に分かれ、日本の海上で合流。日本海上には、オホーツク高気圧と、太平洋高気圧があり、梅雨前線ができ、日本の梅雨の雨となる。

○幼かった私。母が海老のそぼろをつくる大きな摺り鉢を、動かないよう力いっぱい押していたとき、「東京で暮らしていた時『天皇の料理番』に料理を習っていたんだよ」と母。今、テレビ番組の「天皇の料理番」を見ていて蘇った。母の「コンソメ」、オムレット、酢の物……いまも私に余韻と響く。

○我孫子吟行。我孫子行との地下鉄が走っているから方向だけは大丈夫。出掛けてみれば近い所だった。大正時代、志賀直哉、武者小路実篤、嘉納治五郎、徳富蘇峰、高名な方々が、美しい手賀沼を中にして作品を残され、楽しく集われた様子。さすが良い所を探し当てられたことを感心してしまつた。

利根川水系の手賀沼は、高度経済成長期、生活、産業排水

で、死に迫るほど汚してしまったそうだ。昔は、うなぎがいっぱい取れたそうだ。はやく昔に戻りますように。

○何度か引越をした。引越の度に運びきれなくて処分するのは多かつたけれど、生活しているうちに処分した分くらいはたちまち増える。こんな物があつたら身動き出来ない。処分しようと作業を始め：処分しきれないものばかりと気付く。ほんとにどうすればいいんだろう。

○最小単位の教場で、密かに詩を吟することを習う。と決めていた。

「岳精流日本吟院全国吟道大会」日本全土、北海道から沖縄まで。詩を吟ずるを同じくする人々が一同に会する一大イベントを拝聴させていただいた。

詩を活字で読むことは当然だった今まで、詩にリズムが共なうと、全身にゆきわたる感動になる。詩吟ってすごい。

○富士山最遠望は、和歌山県那智勝浦、色川富士見峠より。3776mの富士山が322.9 km離れた所から写真になつた。

○正体不明の目に見えない暗黒物質（ダークマター）が、高い精度で集まっている領域を確定できたという。

かに座周辺に太陽の100兆倍以上の質量をして、暗黒物質のかたよりが9つあるという。かに星雲は、ふたご座としし座の真中あたり、3月頃に真上に白くボツツと見えると。急に身近な出来事になり、びっくりしている。

○小山八幡神社へ。茅の輪くぐりに。誰もいない、千年も動かなかつたような空気の中に、まだ青い銀杏がいっぱい落ちていた。

和菓子街道（106）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(2)

いくつかある姫街道の起点の中でも、今回は池田近道とも呼ばれた東海道見附宿から出発する道を選んで旅を始めた。姫街道に足を踏み入れ、古い土蔵や古墳、徳川家康にちなんだ数々の伝承地を見ながら進むと、やがて道は天竜川西岸の行興寺前に出る。この寺には『平家物語』から派生した能『熊野』の主人公・熊野御前とその母が眠る。

平清盛の子・宗盛によって都に召された当地の美女・熊野御前が、故郷の母が病に倒れたことを知り、帰郷を願うが聞き入れられない。そこで、花見の席で〈いかにせむ 都の春も惜しけれど なれし東の花や散るらん〉と詠んで母を心配する気持ちを暗に伝えたところ、宗盛はいたく感動して熊野に帰郷を許す、というのが物語のあらまじだ。

境内には樹齢800余年の「熊野の長藤」があり、初夏には美しい



藤色の餡が美しい「藤もなか」。

紫の花房が香る。

近くの杉田屋製菓で求めたのは熊野の長藤に因んだ「藤もなか」。池田の渡し場跡に座って天竜川を眺めながら、熊野を忍んで頂いた。

◆杉田屋製菓

住所：静岡県磐田市池田782

電話：0538-32-3931

お知らせ

▽九月号の原稿は、八月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、毎月の原稿に同封して下さい。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集三河便り

感銘歌のコーナーを受け持ち、毎月、御津磯夫歌集から数十首を読んで、中から二首を選んでいきます。私にとつては唯一の勉強の時間となっています。

「いさぎよく皮ぬぎおとし若竹〇なり
ゆくおどりのつやつやの棹」の〇の部分
をインク消しで消し、空白のまま提出してしまいました。先生のお歌は「若竹と」ですので訂正をお願い致します。
△そろそろ梅雨も明ける頃かと思いますが、雨の季節は雨の季節でゆつくりものと思うことのできる季節ではないでしょうか。体調を崩されませぬよう歌作にお励み下さい。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半々年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半々年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができます。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年七月二十五日印刷 第六十二巻 第八号
平成二十七年八月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子・森岡 陽子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会
〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yuri188@cronos.oon.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 核 創 美